

ペン俳句会 句会報(三三五号)

令和四年八月四日(木)

兼題『炎天』、席題『晩』

都内連日三万人超の感染状況下予定していた対
面句会は Zoom 句会へ変更の已む無きに至る。

中村 晃也

晩年を上手に生きて茄子の花
炎天下砂利トラックの土煙
炎天に歩むチワワの足の裏
ひと風呂浴びて晩酌に冷奴
炎天や殻透き通る蝸牛

首藤 しずを

また明晩ささやき合えば夏の月
引潮に砂のさめゆく晩夏かな
夏雲や総出で囲む地引網
見ゆるものあらかた外し夏座敷
五分刈に炎天の庭剪り込まる

松田 一文字

炎天と大地の熱の挟み撃ち
竹林の葉ずれさやけし晩夏光
ひょうたん池折れ線を描くやんまかな
親戻りぱつと口開くつばめの子
日ざかりを傘の影追ふ子犬かな

大津 そうかい

逝く夏や夕日落ちゆく口力岬
ほととぎす急登過ぎたる峠道
大鍋のカレー完食花火待つ
晩年やたゆたふままの根無草
炎天や玄奘不屈火焰山

高橋 由紀子

水蜜のつるりと剥けて良き日かな
炎天下かなへびと一瞬目が合ひぬ
露天風呂遙かに祭太鼓の音
祭果つ常より深き晩の色
生け垣に朝顔ひとつ何処より

浜口 須美子

炎天の空がキャンバスぶらしの木
万緑やルソーの森の息使ひ
梔子や滅びの色の白重し
炎天下背伸びを競う葛の蔓
一晚の浅茅が宿に明けの月

宮原 凧

少年の素振り見てゐる夏木陰
晩年の月日は速し夕の虹
炎天や青息吐息の吾と青菜
花莫座や女一人の避暑地なり
炎天やゆらゆら路面電車来る

新田 ゆふき

酔眼の月にさやけき兔かな
かき氷生え初むる歯とまるき指
晩夏の夢に彷徨う遠き峰
炎天や坂上がるまだ坂上がる
炎天の大杉の蔭終着駅

安藤 晃二

時間止まる百日紅の昼下がり
駅伝や片蔭走る御下げの子
盆参り紹の香に想ふ祖母のこと
日没の黒雲凄し晩夏かな
炎天や亀動かざる渡り石

長尾 進一郎

庭草の青深めゆく晩夏かな
大好きな夏の太陽恐ろしき
炎天の鉄路ゆらめく広野原
大夕立息吹き返す路地の草
溪谷に力又一漕ぎ出す多摩の夏

志村 良知

晩学のピアノ浚ひてビールかな
炎天や忘れ物して戻る道
手拭ひを握りつつ庭へ炎天下
鼻先をひらり掠めて黒揚羽
カナカナの初音に目覚む朝まだき

森田 元斐

仮置きの苗を始末し青蛙

片陰を占めイヌ友と長談義

晩鐘の遠くより来る秋隣

白昼へ燃え上がる花百日紅

炎天や老ひを担げる市内バス

内藤 まりこ

オーガンジー透けし花柄夏夕べ

待遠し晩の一杯生ビール

炎天のガラスに反射冷房中

ウクライナ戦争止めよ原爆忌

水しぶき車の掃除盆向かふ

西川 知世

喪服着て上る坂道瑠璃蜥蜴

大暑来る街を貫き太田川

時計塔の分針力子と油照

日盛や長々と伸び亀の首

晩鐘に日の名残り濃し広島忌

次回は令和四年九月一日（木）、

兼題は中村晃也さん出題の「露」、

席題は西川知世さん出題の「野」

です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

九月の兼題は、秋の天文の季語「露」。夜分、草木や地面や岩石などが冷えると周囲の空気もとりに冷え、水蒸気は凝結して水滴となる。晴天の風のない夜が多い。と歳時記で山本健吉が解説。万葉集にも大方は秋の歌として詠まれている。

露は日が当たると消えるので儂いものたえとして詠われる。露そのものを詠うのではなく、露にたくして心情や変化の多い世を詠うのである。

露の世は露の世ながらさりながら

病床の我に露ちる思ひあり

もの言ひて露けき夜と覚えたり

芋の露連山影を正しうす

猫と生れ人間と生れ露に歩す

白露や死んでゆく日も帯締めて

子に頒つもの遺言と露けさと

露けさの机辺片付けをりしかな

露の旅なかの二日は海を見て

露の土踏んで足透くおもひあり

露の戸を敲く風あり草木染

露そのものを写生した句。

金剛の露ひとつばや石の上

芋の露十歩を行かず芋の露

落ちかゝる葉先の露の大いさよ

芋の葉の大きな露の割れにけり

一茶

子規

虚子

飯田蛇笏

加藤楸邨

三橋鷹女

野見山朱鳥

安住敦

長谷川双魚

飯田龍太

桂 信子

川端茅舎

石川桂郎

星野立子

藤田湘子

林 徹